第二十一回公徳文芸賞入賞作品

【俳句部門】

▽最優秀賞

太陽に麦の金色輝けり　　熊本農二年　池田　海星

【評】「太陽に」で軽くとめて、一気に「麦の金色輝けり」と、麦秋の天地の大いなる稔りを詠んで勢いがある。省略の力であり、作者の農業への情熱と豊饒の大地への感謝がほとばしるような感動の一句。この農業への誇りは、同時作の〈夏の空農魂宿る土を裂く〉と〈梅雨明けて大地に響く鍬の音〉に於いても同様。まるで宮沢賢治の農魂と詩情を見るようだ。なお、この句の「金色」はもちろん、「こんじき」とよんでほしい。（岩岡）

▽優秀賞

夏の夜鮮やかになる人の顔　　熊本工一年　内田　空良

【評】猛暑の中、能面のような昼間の顔たちが生き生きと鮮やかに変化する。そんな夏の夜の存在に作者は気付いたのだ。これは小さいようだけれど大きな気付き。それを詩にした。（西口）

こっぺぱんまた食べに行こ秋うらら　　尚絅三年　北村　紗希

【評】おいしいコッペパンの店。また食べに行こ、の口調の軽さとコッペパンの軽さ。親しい人と楽しい時間を共有できる幸せの実感を「秋うらら」が支えている。季節の捉え方の妙。（西口）

ラムネ瓶打ちつけ取り出す夏休み　　球磨中央一年　谷川　朔磨

【評】ラムネ瓶の中に光るビー玉。取り出すには破壊するしかない。欲しいものを手に入れるためにあえて危険な行為をしてしまう若い驕り。ガラスの破片のきらめきのような夏休み。（西口）

殺風景な私をむかえるチューリップ　　尚絅一年　髙橋　真歩

【評】春は憂鬱。新しい環境に馴染めるだろうか。春色に輝いている周囲のものたちと対照的な自分を、「殺風景な私」と表した。チューリップの優しい明るさに救いがあっていい。（西口）

青二才夏野を走る夢追って

球磨工二年　黒木　琉

【評】自分のことを「青二才」とよんでいるところが、大胆で自由。「夏野」がいかにも若く、一気に思いを吐露して、さわやか。（岩岡）

▽入選

月光や御輿来海岸の波紋　文徳一年　村上　愛梨
蝉よりも大きい声で母笑う　尚絅一年　本多　美智瑛
愛猫が目を丸くする花火かな　熊本工一年　山田　哲平
夏の日に鳴き声響く畜産棟　熊本農二年　砂川　ひかり
溶けていく疲れた僕とかき氷　熊本農二年　松田　拓海

▽努力賞

自転車で下る坂道若葉風　尚絅一年　井上　柚南
炎天下それでも僕は走りぬく　球磨中央一年　栃原　和奏
面接で頭の中は蝉時雨　熊本商三年　富永　マオ
暑い夏草刈る君は英雄だ　熊本農二年　穴井　ひなた
五月雨に今だに隠す胸の奥　球磨中央一年　清永　多葉沙
夏の蝶七人さそいて坂の街　熊本工一年　吉田　日和
電話ごしともに見上げた夏の星　球磨中央一年　佐藤　美空
薔薇のさく実家はいずれ立ち退きと　熊本農二年　森髙　愛央
親友と夜空見上げて夏終わる　水前寺高等学園一年　米野　沙弥香
夏空に映し出される新記録　ひのくに高等支援三年　尾田　ひなた

【総評】今回は投句数もふえましたが、何より生活実感のある力強い作品に出会えました。日頃の感動を深くとらえて、まるで日記のように短い一行の詩で表現することは、楽しいことです。

最優秀句の「太陽に」、優秀句の「夏の夜」、入選句の「月光や」、「夏の日に」、努力賞の「自転車」、「夏の蝶」などはどれも、高校kせいらしい若々しい写生句で、直感と感動に満ちています。また、「ラムネ瓶」、「殺風景な」、「青二才」、「溶けていく」、「炎天下」、「五月雨に」などの句は、自分の内面世界へ深く分け入った魅力ある作品です。人生にはその年代にしか詠（よ）めない句もあります。これからも自分の人生の良き伴走者として俳句を詠み続けて下さい。俳句はその時々つくって楽しく、また、ふり返ってみて楽しいものですから。（岩岡中正）

多くの字数を使って作者の見たものや体験したことを具体的に描けば描く程、その再現に近づけます。しかし、それでは読者側の自由が奪われかねません。俳

句はほとんど沈黙に近い文芸です。面白いことに、情報量の乏しさ、言葉の少なさは、むしろ読者の想像力を掻き立てます。もちろん、作る側にはぎりぎりのことばの選択が求められます。今年は、多くの作品の応募がありました。その中から、特に自分の生活を生き生きと切り取った、個性の輝く俳句を選びました。

どうか、〈作る〉で終わらずに他者の作品を味わってみてください。声に出してリズムや響きを味わうことをお勧めします。俳句の謎を自分流に解くのは面白い作業です。さらに、数人の仲間と互いの作品を鑑賞し合うことで、また新しい発見ができるはずです。そんなこんなが、〈遊び〉です。ことばで遊ぶって、楽しくて素敵な体験です。俳句は、そんな遊びに最も近い場所に在る文芸です。

（西口裕美子）

【短歌部門】

▽最優秀賞

張り詰める空気がなぜか心地いい汗つたう頬弦の鳴る音

玉名工二年　村田　菜緒

【評】弓道部での練習中の一瞬を見事に捉えた作品。下の句の「汗つたう頬」「弦の鳴る音」という具体的表現が緊張感を醸し、上の句の「心地良さ」に繋がっている。音律も美しく、緊張感あふれる秀作である。今年も昨年の野球部に続き部活を詠んだ作品が最高賞を射止めた。（橋元）

▽優秀賞

夏休み親と一緒に広島へ平和を願う気持ちが増えた

文徳一年　坂口　凛映花

【評】一行詩のようでリズムが幼いと思われるかもしれないが、下の句の措辞の純真な気持ちの発揚が何とも尊い。大人が忘れてしまったようなものにはたと気付きをくれる。（塚本）

夏の昼音楽室になり響くパーカッションを打つ手が赤い

菊池女子一年　別府　さくら

【評】吹奏楽部の夏休み中の練習風景に着目した作品である。この歌の魅力は結句の「打つ手が赤い」にある。ドラムをたたき続けた奏者の手が真っ赤に腫れあがっているのを作者は見逃さなかった。「赤い」が「真っ赤」ならもっと良かった。（橋元）

別れ道夕日に溶けるその笑顔「またね」の言葉は君に届かず

熊本一年　住永　大河

【評】いつともしれないいつか、けれど確かに今という時間の吐息のような、ぽろっと零れた肉声の快さがあり、青春の風格がありあり。（塚本）

久しぶり押し入れの中整理して忘れた思い出昔の自分

盲学校三年　黒木　俐玖

【評】久しぶりに押入れの整理をしていたら幼い頃使っていた品物（玩具か）に触れたのである。その様子を「懐かしい」などと言わずに「忘れた思い出昔の自分」と客観的に表現して成功した一首。具体的な物が歌われたらもっと良かった。（橋元）

教壇に立つ先生の姿見て私もなると人生決めた

芦北三年　中野　悠菜

【評】一読、格好良いなあと嘆息。とくに結句の言葉が大胆で、冴えている。何がしかの促しを与えてくれるのが〝先生〟なのであろうおと改めて思う。（塚本）

▽入選

祖母の家盆の集まり大笑い一つのテレビで心深まる

熊本農二年　古葉　翔太

「ありがとう」恥ずかしいのはなぜだろう友には言える親には言えず

尚絅三年　齋藤　菜乃葉

教室の窓から見える夕焼けに胸の奥まで染まる切なさ

芦北一年　橋口　海武

ミニトマト庭で初めて育てたよ愛着湧いて腐敗が進む

球磨工三年　須恵　ゆうみ

黒板に消え残ってる文字薄し前の授業の跡を残して

済々黌二年　村上　菜月

▽努力賞

せっかくの高校最後の夏休み進路に追われ息つく間もなし

盲学校三年　岩佐　遥偉

落ち染める夕焼け赤き学び舎に友と語らうひと時の夢

熊本商三年　田上　悠翔

喜も楽も哀も怒さえも君の声届け電気で僕の内耳へ

御船一年　森山　三華子

木の陰に降る木漏れ日ながめつつ思い巡りて夏が過ぎゆく

菊池女子一年　中島　陽向

暑い夜手持ち花火を持ちながら熱い火花の散る美しさ

球磨工二年　元田　瑠希也

青空に夢を描いて駆け出せば風も味方に光る夏道

熊本商三年　永石　悠人

好きなんだ送れずにいたメッセージ三文字消してだったと送る

文徳二年　石橋　蓮

海風に規制線さえ朽ち果てて錆びたブランコ三度目の秋

済々黌三年　小田　朱莉

【総評】今年の最優秀賞作品は昨年に続いて部活を詠んだ作品が選ばれたが、高校生らしい上に、ぴりっと締まった見事な作品だった。優秀賞作品を見渡しても、被爆地広島を訪れた感想。将来の自分を教段の先生に重ねた歌。入選作品の中には家庭の団欒、親との関係など学校外に取材した作品が散見された。一言で言えば、作品の多様化と言ったらいいだろう。また、今年の大きな特徴として、先生に言われたので仕方なく作りましたーと言うような作品がほとんどなかったことである。このことは、二十年以上に渡ったこの「公徳文芸賞」がそれなりの浸透をみせ、熊本の高校生の文芸活動の向上に多少の貢献を果たした証拠であり、公徳会に祝意を送ると共に選者として感謝するものである。公徳文芸賞が今後さらなる発展を遂げ、高校文芸、中でも高校生の短歌にに確かな風を起こしていくことを期待してやまない。（橋元俊樹）

今回は短歌部門に四八九首の応募をいただきましたが、指導の先生の教えをよく聞き、また短歌についてよく分からないところは質問してから作歌してほしいと思います。

短歌は万葉の時代から連綿と続く伝統詩型です。五句三十一音から成る定型詩です。

形式が決まっているのはどうも不自然で堅苦しいと感じる人がいるかもしれません。しかし、形式が決まっているからこそ自由に表現ができ、豊かさと奥ゆかしさがあるのです。その豊かさと奥ゆかしさは、自由な発想と折々の感情を言葉に託し、言葉を選択し、それを繋げることによって、意味と同時にリズム（調べといい、韻律ともいいます）とイメージを伝達できるのです。

そのためには、言葉を大切にしたい。「言葉はこころ」なのです。（塚本諄）

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「斑入りのてつがく」

みたす、みたされる、なんていうくだらないひかりが小窓にさして
諦めを吐きだす必要はもうないんだよ
きらいなあのこわばりのことはぼくもよく知ってる
あなただけ変わらず、罫線のない白紙の上にいる
それなのに
それなのにあなたは哲学者になれない
布団から出られないあなたは哲学者になれない
軽々と笑うぼくと違って
あなたはへとへとで生きている
愛しい人としてあなたをみとめる
それだけができない
それだってできない
この部屋は日数とか点数とかを
あなたに叩き出させようと腐心している
その小さな画面のなかに
世界を見いださせまいとしている
誰もみんな空の大きいことに気がつきたくないの
いつかの新学期
ぼくは朝のまとう排他がこわかった
世界から切り離された青空の下に
存在することが耐えられなかった
鼻呼吸よ、永遠にできない鼻呼吸よ
あなたが息をしている
羨ましさと憐れみと共感覚
あなたが何気なく食卓に置く、その疑問符を好きになる
麦茶をこと、と飲みほす音で
あるいはティッシュボックスの不足を知らない感触で
ぬいぐるみを抱えて言うゆるやかな確約で
まばゆい朝が来てしまう

熊本２年　松浦　瀬戸

【評】高度な筆力に圧倒されました。同一色の世界に浮き彫りになった、ぼくやあなたという異質な「斑」。喪失感を抱えながらも現実を冷視し、眩しい朝に抗えないもどかしさが胸に迫ります。最後五行の表現も秀逸です。

▽優秀賞

「おたからさがし」

ぱたんっ
音を立てて本を閉じる
最後の数ページだけを残して
「早く読みたい」
そんな気持ちを
大事に大事にしまい込んで

そして目を閉じる
そして旅に出る
自分だけの結末を
正しい解とはまた違う
可能性を探す旅へ

それが「ハッピー」でも、「バッド」でも
私だけの
あなただけの
すてきなすてきな冒険譚

次回予告を済ませたら
さあ、行こう
次は答え合わせの旅へ
世界にたった一つだけの
エピローグという名の宝を求め
今、
ページという名の扉を開いて

済々黌2年　右田　未羽

【評】作者なりの読書の楽しみ方が軽快に綴られている詩で、ゲーテを彷彿とさせました。想像する喜びや本を愛する気持ちがよく伝わってきます。書き方に無駄がなく、まとめ方も上手です。

「一人きり　マスカレード」

仮面を外した世界はどんな色をしているだろうか
仮面を外した世界で君は笑っているだろうか
仮面を外した世界で僕は笑っているだろうか

いつからだろう
即席の仮面で隠したのは
閉ざした瞳で君を探すのは
仮面の裏に安らぎを感じるのは

なのに、なのにどうしてだろう
仮面の裏がモノクロなのは
仮面の裏が滲んで前が見えないのは
仮面の裏で暴風雨がやまないのは

仮面の裏の僕は笑えていただろうか

ずっと、ずっと前から気づいていた、気づいていたのに……
仮面に入ったヒビを何度も何度も繕って
そのたびに仮面は厚くなって
仮面の裏はいつしか音もなくなってしまった
仮面を壊せる「勇気」という名の道具が僕にはない

あぁ攫い出してほしい
仮面の裏で光を求める僕を
仮面の裏で音を求める僕を
「本物」の僕を
仮面の裏で笑い方を忘れる前に

シャル・ウィ・ダンス？
君だけの魔法の道具

熊本２年　吉原　航

【評】仮面を被った自分に絶望し、仮面をとった本当の自分を探し求めている姿が思い浮かびました。仮面を偽物の僕として象徴しながらも、孤独な舞踏会と表現している点が独創的です。

「オネガイ」

ぽっかり空いた心にぴったりはまるピースなんて
この世界どこを探したって見つかりやしない
だってもうないんだから
何度カワリを探してもはまらない
ツギハギだらけの心はもう動かないんだ
心のお医者様はとっくの昔からいやしないんだから
手を取ってほしい
強く強く握っていてほしい
もう二度と離れないように
時よ戻ってほしい
遠い遠い記憶の中に
ぎゅっと押しこめた暗い底まで
忘れたい記憶が残って君が消えてしまうなんて
隣にいてほしかった
ただいるだけでよかった
こんなワガママ叶ったりしないかな
ワガママなワタシの
ワガママなネガイ

芦北２年　渕本　麗愛

【評】大切な存在を失い、孤独に苛まれる様子が伝わる詩です。いなくなった「君」が、恋人か家族かペットか、直接的に表現していない点も素晴らしく、失う悲しみに読者を集中させます。

「夜が明けなければいいのに」

春の夜は少し冷える
けどたまにぬるい風が
頬を撫でて　髪を梳く
優しい風は夢へ誘い
夢は桜のように
儚く微睡みと共に消える

夏の夜は短い
けど白昼夢を見ているようで
雨が降ることもあるけれど

その音は私にとって子守唄
思い出だけを残して夜が明ける

秋の夜は月が大きく満ちて
すすきを金色に輝かせて
虫の音を響かせて
小さい窓から射し込む光は
きっと明日を照らしてくれる

冬の夜は少し重たい
赤くなった耳や鼻を
マフラーに隠した
刺してくるような澄んだ風
凍てついた暗い夜が
自分の心を落ちつかせてくれる

そんな静かな夜が好きだから
夜に願うように囁く
「夜が明けなければいいのに」

南稜3年　奥園　瑠綺亜

【評】四季それぞれの夜を描いた詩で、しっとりとした雰囲気が漂います。言葉の連なりも美しく、品性を感じます。特に各連の最終行には表現の工夫が見られ、印象に残る締めくくり方が見事です。

「弓道」

弦を引き絞り腕に重さが伝わる
弓を押し指に重さが伝わる
いつも同じ音がなるとは限らない弦音
心情が表れる矢所
真なるものは美しく　善なるものは美しい
的は鏡である
そこには
弓と矢　的と自分
それ以外なにもない

南稜2年　濵﨑　美來

【評】弓を的に射るときの緊張感が伝わる詩です。そのときの様子をただ描くのではなく、五行目以降の展開では、心情を反映する弓道の本質を突いています。短いながらも完成度に優れた詩です。

▽入選

「日常」

私の日常は、いつも通り朝起きて学校へ行く。
学校が終わればいつも通り家へ帰える。
だがこの日常は「あたりまえ」ではない。
ある国では、学校へ行けず家の手伝いをする。
また違う国では、住む家もなく一人で過ごしている。
その生活がその子たちにとっては「日常」なのだ。
同じ世界にいるのにどうして
こんなにも「日常」が違うのだろうか。
何気ない「日常」だけど
一日一日がとても貴重なのだ。
明日何が起こるか分からない。
だからこの「日常」を大切にしなければならない。
そんな「日常」を毎日生きている。

球磨中央３年　川嶋　優佑美

「金木犀」

すれ違い　淡く香るは　金木犀
誰かの隣に　寄り添う貴方の
私の知らない　楽しげな声
誰かの瞳に　焦がれる貴方が
知る由もない　私の憧憬
ここに存るのに　そこには居ない
貴方の好きな　金木犀の散る間際
甘くて柔い　あの日の香りも
季節が変われば儚く消える

立ち止まり　ただ鮮やかに　金木犀
誰かに微笑む　愛しい貴方の
私の知らない　優しい紅潮

誰かの夢に　恋する貴方が
知る由もない　私の切望
眩しいくらいに　映えるその色
貴方の好きな　金木犀の　花言葉
静かに燃える　あの日の景色
季節が変われば　虚しく消える

足元を　花で染めるは　金木犀
儚い香りも　褪せた色も
貴方は知らない　私の陶酔

球磨中央２年　今村　光花

「じぶん」

人は多面的だ
見せる面もあれば
見せない面もある
心は悲しくても
笑っていることもある

人は移ろいやすい
どんなに好きなものでも
ほんの少しの変化で
嫌いになる

人は矛盾する
一人が好きだと思っていても
人といると楽しくなる
一人が好きなのに
一人だと心細くなる
嫌いなのに
大事にしてしまう

人は不思議だ
そんな自分を大事にしたい
そう僕はそんな人なんだ

南稜３年　前村　京威

「今の思いを」

ふと、すぐそこにある紙とペンで
今の思いを書き表す。
すらすら　すらすら　ペンは走る
つらつら　つらつら　つらつらと。
時々止まる。
ふと　涙がシーツに落ちて、
今の思いをよく見つめる。
ぽろぽろ　ぽろぽろ　ぽろぽろと
ずずっ　ずずっ　ずーっ　はあ。
遠くを見つめる。
その時、その瞬間、私の思いは出てこない。
少し経ったら、ようやく顔を出す。
ああ。やっぱり私、嫌だったんだなあ。
今になったら分かるよ。
あの時の私、ごめんね。

鎮西３年　高濱　菜々子

「ゆらぐ」

ゆらいだ、自分の道がわからないから
ゆらいだ、行動の正解も知らないから
ゆらいだ、犯した過ちを忘れられないから
狭間でそっと灯がゆらぐ
風が吹くと気持ちが見える
理由がないだけ、だから生きてる
理由がないだけ、だから探してる
理由があればこの火は消せるだろうか
いまはただ、光を灯す
広く世界を見てみれば
ゆらいだ、ただひたすらな欲のため
ゆらいだ、己の正義を守るため
ゆらいだ、苦しい今を変えるため
心にそっと炎を燃す
風に飛ばされ気持ちは消える

理由があるから、だから争う
理由があるから、だから求める
理由があればこの火を消してもいいのだろうか
いまはただ、光がかくす
風を捕まえ心に当てる
ゆらげ、大きな光になるために
ゆらげ、覚めない夢にするために
ゆらげ、迷いの先を示すために
誰かを照せる火になるために
命でゆらぎ心を燃す
理由がなくとも、生きれるように
理由があっても、生きれるように
理由なんて、幸せには必要ない
ゆらぐ、誰もが笑えるその日まで

鎮西３年　中山　天聖

▽努力賞

「夏の花火」

赤い花
青い花
君を照らしてくれる大きな花
身の周りも
これからの道も
あの花が照らしてくれそうだ

芦北２年　村上　結十

「四季と私たち」

日本では四季がはっきりしている
そんな中で住ごす私たちは幸運の持ち主

桜が咲くのは春
お花見をするのは春
新しいことが始まるのは春
別れがあり出会いがあるのは春
初めてが多く不安になるのは春

花火が上がるのは夏
冷たいアイスが美味しいと感じるのは夏
ひまわりが咲くのは夏
宿題に追われるのは夏
暑さのせいでやる気が起きなくなるのは夏

葉っぱが落ちるのは秋
月が綺麗なのは秋
ヒガンバナが咲くのは秋
梨を食べたくなるのは秋
ふと寂しい気持ちになってしまうのは秋

雪が吹ってくるのは冬
こたつで暖まるのは冬
みかんをたべたくなるのは冬
手が固まって文字が書けなくなるのは冬
体調管理が難しいのは冬

私たちはこんな暮らしが毎年できる
辛いことや楽しいこと
日本でしか味わえない素敵なこと

「夏の想い出」

また、今年も夏が終わった。
ずっと「追いかけていた」夏だった。
先輩の背中を、仲間の影を、
自分の夢を。

ずっと「憧れていた」夏だった。
ずっと「夢をみていた」夏だった。
ずっと「あつかった」夏だった。

実らない努力があると知った。
叶えようもない夢があると知った。
知りたくないことを知った、そんな夏だった。

尚絅1年　四本　莉子

また、今年も夏が終わった。
けれどまだ、「青い」春は終わらない

文徳２年　亀田　来実

「今年の夏」

今日も今日とて暑い夏
外に出るのは　やおいかん
これじゃまるで　引きこもり

今日も今日とて　悩む夏
勉強するの　やおいかん
気づけばすぐに　期末テスト

今日も今日とて　せわしい夏
友達と遊ぶのにも　やおいかん
次に遊ぶ日　待ちわびる

高校最後の　迷う夏
進路決めるの　やおいかん
後には退けない　覚悟は決めた

盲学校３年　岩佐　遥偉

「私の家族」

私のお家は、７人家族
私のパパは、トラックのドライバーさんだ。
すごくやさしくてかっこいい。でもおこるとこわい。
私のママは、いつもみんなのごはんを作ってる。
家族みんなの心配をしてる。
私の弟は、いつも、元気がいい。
元気よすぎて、うるさかったりするけど、やさしいときもある。
私のおばあちゃんは、おまじゅうやさんではたらいている。
私も、おばあちゃんと同じとこではたらいておばあちゃんをたすけたい。
私の伯父ちゃんは、トラックのドライバーさんだ。
私と弟のおむかえにきてくれて、いつもやさしい。

私の叔父ちゃんは、トラックの助手をしている。
ほとんどしゃべらないけど、こまっている時に、助けてくれる。
朝からバスていまで送ってくれてる。
私は、お家以外で、大きな声で話すことが難しい。
大きな声で話そうとしてもなかなか話せない。
まずは、大きな声であいさつができるようになりたい。
これが私の７人の家族。
なやみごとがあったり、しんぱいごとがあったり
助けてほしかったりする時に
話を聞いてくれて助けてくれる。
家族とは、支えあって
生きていかなくてはいけないと思う。
１人でなやまずに、何でも話してほしい。
困ってるなら言ってほしい。
助けてあげたいから、教えてね。
私は、そんな７人の家族が大好き。
この家に生まれてきて幸せだ。
これからもよろしくね。

熊本はばたき高等支援３年　小田　詩桜

「自由にあきる」

自由はみながが、欲する宝
なぜ世界は自由ではなく縛りがあるの
世界は、縛りがなければ自由ともいえぬ
自由は人の欲望、お金も同じ、
自由と不自由な世界、今変えるべし
自由の先に何があるのか、
誰にも分らぬ
自由とて、世界の不自由なのかも、
自由はとてもお金がかかる。
必要なのは、お金かもしれない。
自由を買うべくみな働く。
結局、自由って何か分らない。
自由とは幻の宝だと思う。
だが、いずれ自由にあきる

熊本はばたき高等支援３年　田中　渉雅

「お母さんの枕」

なんだかわからないけれどイライラして
なんだかわからないけれどモヤモヤして
脳裏に浮かぶ人々は
なにも悪くないのに
なぜだかずっと悲しくて

玄関の前で足が止まる
上の弟はサッカークラブ
下の弟は離れた病院に入院中
両親は交代で付き添っている
目を惹けない手を引けない

粗い画質の母と弟に
明るく笑って、手を振って
元気が出るようにエールを送ったの
暗くなった画面には　震えるへの字口

なんだかわからないけれどイライラして
なんだかわからないけれどモヤモヤして
誰に話していいのかわからなくて
誰も悪者にしたくなくて
コップの水はギリギリで
なぜだかずっと悲しくて
独りで眠るのが限界で
家族のぬくもりに触れたくて

嗅覚は一番記憶に残るらしい
掛け布団にしがみついて
敷き布団に体重を押しつけて
抱きしめた枕の匂いを　私は一生忘れない

出水中央３年　　秋山　にこ

【総評】詩の本質は批評や比較からすり抜けていくものである。選評という矛盾した作業は重荷であるが、今回から二人で選ぶことになり気分的には楽になっ

た。いつもながら若い人の言葉からは今年も学ぶところが多かった。例年に比べ戦争や災害をテーマにした作品はほとんど姿を消した。ただ、それはそれらが極めて日常的な事件になってしまったからかもしれない。もしかしたら、暗黒を孕んだ日常の中で生きる、自分と他者への哲学的な眼差しや思索として深化しかけている気もする。例えば最優秀賞の「斑入りのてつがく」において歌われる「あなたの」は謎めいていて多義的である。「ゆらぐ」や「一人きりマスカレード」にも言葉による思索の初々しさを感じる。「オネガイ」や「お母さんの枕」の喪失感は読み手の心を打つだろう。「おたからさがし」には驚いた。本の結末を予想する行為は、ゲーテが母親から教えられた読書法を彷彿とさせる。やはり高校生は侮れないのだ。（内田）

高校生の詩は、成人した今のわたしにはない感性が煌めいている。言葉や表現が稚拙でも、朝の光のように、まっすぐで透明だ。今回初めて審査員を務めたが、家族愛や四季の賛美、夏の思い出などを素直に綴る詩が散見され、好感が持てた。また、「多様性」や「推し」など、令和を象徴する言葉を用いた詩があったことも特筆すべき点である。一方で、自己の内面を深堀りし、葛藤や衝動といった多感な精神世界を描く詩にも強く惹かれた。着飾らない言葉だからこそ彼らの哲学は剥き出しだが、真正面から読者と向き合う真摯な態度がにじみ出ていて、どこか責任めいたものも感じた。さらに、入賞・入選作品には、言葉にならない気持ちを冷静に見つめ、書くことで昇華している作者の姿が思い浮かばれた。詩型を意識した破綻のない書き方も共通の評価点である。凝縮した一行や、連の展開、行分けなど、一定の「読ませる」技術が備わっており、感心するばかりであった。これからも詩を書く楽しさを感じながら、自分の表現を見出してほしい。そして、ぜひ書き続けてほしい。（深町）

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

転校生　君との記憶テラバイト　　球磨中央二年　東　優希

【評】転校の別れを詠んだ唯一の句である。人とは違う着眼点が良かった。また情報量を表すテラバイトという単位を使うことで思い出の多さ、深さを表現することができた。転校しても続く友情を思わせ暖かい句である。（鳴神）

▽優秀賞

憧れて　気付いてしまう現在地　　芦北三年　川畑　秀飛

【評】憧れの対象と今の自分を比べ、「よし」と思うことで憧れは目標に変わる。

後は目標に向かい前進あるのみ。「現在地」の表現が秀逸である。（鳴神）

憧れて　辺りに響く排気音　　熊本工三年　野口　昇大

【評】高校生ならだれでも憧れるバイクを「排気音」を使って表現した。乗ってスロットルを嬉しそうに回す作者の様子が目に浮かぶような句である。

憧れて　三日坊主も本気だす　　球磨中央一年　佐藤　美空

【評】何事も三日坊主だったのが本気で変わろうと動き始めた。生き方を変えることは人生においてそうないこと。「憧れ」に導かれ一歩踏み出した自分を褒めながら頑張ってほしい。

憧れて　ホールに響く音の粒　　済々黌二年　植木　倫子

【評】音楽が響く空間を音の粒と表現した感性は鋭い。音楽への熱い想いを聞いてみたいものだ。演者と観客のどちら側だったのだろう。

転校生　一人ぼっちの帰り道　　熊本工二年　平川　聖依

【評】「新しい環境の初日は長かったな」と、すぐに友達と一緒に帰る日が来て、一人で帰った日を懐かしく思い出すだろう。そんな思いが伝わってくる。

▽入選

憧れて　出てきたものの阿蘇恋し　　尚絅三年　瀬津　優美香
大笑い　些細なことが青春だ　　済々黌二年　高村　悠加
大笑い　貧乏神も逃げる家　　球磨工二年　源　響也
憧れて　次の五輪は俺が出る　　熊本商三年　原田　光晟
転校生　光って見える始業式　　文徳一年　神田　源

▽努力賞

大笑い　ばあちゃんの歯が飛んできた　　熊本工一年　藤岡　優衣
大笑い　元気でてくるおまじない　　球磨工一年　尾方　瑛人
憧れて　母の優しさめざしたい　　熊本はばたき高等支援一年　横山　侑加
転校生　ここにもあった青い空　　球磨中央二年　那須　千里
転校生　席がとなりでよろしくね　　松橋支援一年　渡邊　皓亮
大笑い　健康のためワッハッハ　　芦北支援一年　北岡　侑晟

大笑い　ゴーグルつけた日焼けあと　　球磨中央二年　尾之上　まりな
転校生　鼓動はやまる恋心　　球磨工三年　井手　快成
大笑い　あごがはずれて大惨事　　芦北一年　馬場　風熙
転校生　まずは何から話そうか　　熊本工二年　宮本　ちさき

【総評】肥後狂句部門への応募が増えたことに驚きと感謝の気持ちで一杯です。すばらしい発想の句、高校生らしい素直な句にたくさん出会うことが出来ました。狂句のルールが守られてきたことも嬉しく思います。

肥後狂句の本質は「穿ち」であると言われます。物事の本質や人情の機微を句に詠みこむのです。そこにユーモアや批判精神が盛り込まれ数々の名句が生まれてきました。

今回も思い付きをそのまま句にしたものが多くありました。それは人と同じような句になってしまうことを意味します。発想を広げ、笠を裏から眺めながら何句も作るうちに人とは違う良い句が生まれます。句から何かを想像させる、句を通して人や状況が見える、そんな句が出来たらいいなと思います。今回選ばれた句はそういった意味でどれも秀でていました。人生のどこかで肥後狂句を思い出し、取り組む機会があれば幸いです。（鳴神景勝）

たくさんの投句をいただきまして、うれしく思います。一緒に狂句を広めてゆきましょうそのためにもルールをさらに学び、より狂句に興味を持ってください。

今回、自信の作品なのに選ばれなかったと嘆いていませんか。それは、あなたと同じ句（合句）や似た様な句（類句）がたくさんあったためです。出来た句が話し言葉になっていますか？　字余り・字足らずはアウトです。これらは基本的なものです。ここでの取りこぼしは避けたいものです。

ぜひみなさんのみずみずしい感性で、ウィットに富んだ作品を詠み上げて周りの人に笑顔を与えたり、うなずかせたりと思いを十二音に託しましょう。慣れるまでは指を折って声に出しましょう。期待しています。また狂句でお会いしましょう。（山野風船）